

## 使徒言行録16章16節—40節

### 『主イエスを信じなさい』

今日の使徒言行録の聖書箇所は長い箇所ですが、何度も読んでいくと、連続する話のはっきりとしたつながりがあるように感じられます。

フィリピで伝道を始めたパウロたち一行が祈り場に行く途中、占いの霊にとりつかれた女奴隷に出会います。占い、というのは現代でも様々な形で行われているのですが、この女性は占いの霊に憑依され、取りつかれ、そのうえでその占いの収入を主人たちに搾取されている奴隷であった、というのです。なにかの霊にとりつかれている、と言うとわたしには無縁だと思う人もいるかもしれませんが、それが、そうなのでしょうか。

パウロはイエス・キリストの名によってこの女性から霊を追い出す、解き放つのです。するとこの女の主人たち（複数いたということは何か組織になっていたのかもしれませんが。）はこの女から金儲けの望みがなくなったこと知って、パウロとシラスをとらえ、役人に引き渡すのです。さらに二人は高官に引き渡され、裁判も取り調べもしないまま逮捕され、獄中につながられるのです。真夜中、パウロとシラスは獄中で神を賛美し祈っていた。囚人たちはそれに聞き入っていたという。ところが大きな地震が起こり、牢の土台が揺れ動いた。結果牢の扉も開き、囚人たちを縛っていたものはずれてしまった。目を覚ました看守は囚人たちが逃げってしまったと思い込み、自殺を図ろうとするのです。それを見たパウロは大きな声で、「自害してはならない。われわれはみんなここにいる。」看守はそれを聞いて驚き、パウロとシラスの許へ行くのです。

看守はてっきり囚人たちがみな逃亡したと思い込んで、自殺を図ろうとしたという。囚人たちが逃げ出したかどうかも確認せず、自殺とは気が早すぎるといえばいえる。しかし、看守はとにかく、自分の思い込み、自分の考えから外に出ることができず、自殺しようとした。女奴隷は、占いの霊にとりつかれていたという。だが一方この看守も何かに拘束されていたのではないか。取りつかれていた、と言ってもいい。それは、自分のいささかの考えや判断による思い込み、自分の考え見方、自分がこうだと思ったそのことにとらわれている、ということ。視野狭窄。だから彼は自殺を思う。だが看守はなぜ、パウロの「自害してはいけない、わたしたちは皆ここにいる」、という声だけで、パウロのもとに進み出て、「救われるためにはどうすべきでしょうか。」と尋ねたのでしょうか。看守はパウロの言葉を聞いて安堵したと思います。よかったあ、と胸を

なでおろしたでしょう。しかしそれだけでなく、看守はこのとき、パウロとシラスの姿に、自分にないものを感じたのではないか。二人が不当に逮捕されて、牢獄にまで入れられて、なお神を賛美し、祈っている姿は看守にとってあり得ないこと。頭おかしいんじゃないか、と思うような姿ですよ。囚われているのに、絶望しないどころか、神を賛美している。看守は驚いていたのではないか。

地震が起こって、囚人が全員逃げ出した、と思ったとき、彼は囚人は逃げるものだと思い込んでおり、もう駄目だ、と思った。自分の仕事がうまくいかなかったとき、何らかの失敗したとき、もう駄目だ、と思う、あの思い込みです。つまり看守には看守の考える世界しかなかった、ということです。思い込みで判断する、ということは、自分の観念、自分が考えていることでその人の世界は成り立っている、ということです。看守は自分は牢に入らず、牢を監視する側にいると思っているけれど、彼自身が自分の思い込みという牢の中に入っているのではないか。自分の思い込みという鎖につながれているのではないか。しかし牢に入っても、地震に遭遇してもダメだと思わず、逃げ出さないパウロを見ていると、繋がれているのは誰なのだ、と思わされるのです。看守は自害してはいけない、という声を聞くのと同時に、人間はどうしたら救われるのか、この人に聞きたい、と思った。

今日の聖書箇所には、いろいろな人が登場します。女奴隷の主人たち。役人、高官、看守。確かにこの人たちは、女奴隷のように取りつかれているとは人々は見なかったかもしれない。普通の社会生活をしている人たちだったかもしれない。しかしこの人たちも何かに縛り付けられている。繋がれている。

最初に申し上げたように、占いの霊にとりつかれた女奴隷、彼女とわたしたちは無関係なのだろうか、と思います。霊にとりつかれて、女奴隷は自分ではないものに憑依される。そしてその自分ではないものに自分を占領されて、自分を見失ってしまう。

看守は自分のさしあたりの考えしか見えなくなって、自分を見失うのです。もちろんこの看守のことを人は何かにとりつかれている、とは言わないのかもしれない。だが、本当にそうなのか。

祈祷会でヨハネの黙示録に聞いていますが、今読んでいるところでは終末の光景が幻によって映し出されていく。神のみ前に多くの群衆が立つという場面がある。そのときこの大群衆のことをこの人たちは苦難を通過してきた者たちだ、という声が聞こえるのです。終局の場面では人間のこれまでの姿が見通される。

その一つのことを、苦難を通してきたもの、ということなのです。その苦難には、愛する者を失ったとか、おおきな痛手を被ったとか、自分自身の死の苦しみというものも含まれている。しかし苦難の一番深いものは何かと言うと、人間の生涯を通じて襲われる悪魔の誘惑なのです。悪魔は繰り返し人間を誘惑に誘う。人を心から愛せない、受け入れられない、人を傷つける、いや、そもそも心を尽くし思いを尽くし精神を尽くして神を愛していない、神から遠ざかり、神の言葉ではなく自分の言葉を聞こうとする、その一つ一つがすべて悪魔の誘惑なのです。わたしたちは、その誘惑という苦しみの生涯を送ったものだ、と天上の声は言うわけです。ルカ福音書に放蕩息子のたとえ話があります。父親の許を勝手に飛び出して、父親の財産で好きなように暮らし、そのお金が無くなると、また自分勝手に父親のもとに帰ってきた、そういう息子が出てきます。あれは悪魔の誘惑に負けてぼろぼろになっている姿ですよ。自分を見失っていく姿。いや自分が何者なのか、わからない人の姿です。後で登場する兄も、誘惑にさらされて、負けていく人です。

なにかにつかれているのは、女奴隷だけではない。看守だけでもない。主人たち高官だけでもない。わたしたちも悪霊や悪魔の力の中で、自分を見失っていくのです。しかもやっかいなのは、自分を見失う、というけれど、その自分というものがそもそもよくわからない。自分が自分を本当にわかっているとは限らず、自分を見失っていることも実はわからない。なにかの力の前でいとも簡単に自分を乗っ取られ占拠されてしまう。悪魔の誘惑に簡単に負けてしまうこの自分が救われるにはどうしたらいいのですか、と看守は聞いたのではないか。

パウロは単刀直入「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」と答える。わたしたち何かにとりつかれたり、悪霊や悪魔に誘惑され、時には乗っ取られたり占拠されているこのわたしが救われるためにはどうしたらいいのですか。主イエスを信じなさい、そうパウロは応えた。そのことに尽きる。主イエスの十字架と復活の恵みを受けなさい。キリストに背負われている自分を受け取って見失った自分を取り戻し、自分を回復して生きていきなさい。主イエスを信じなさい。看守とその家族はすぐに洗礼を受け、パウロたちを家に招き入れ、ともどもに喜んだ、というのです。

翌日パウロたちは高官の命で釈放されるのですが、ローマ市民として不当な取扱いに対して抗議する。すると高官たちがパウロのもとに来て謝罪する、ということがあったのですが、こんどは丁重に町から出て行ってほしいと言い出すのです。踏んだり蹴ったり。福音を語る、それはこの世において歓迎されな

い現実も起こってくる。この世は本当に福音を必要としているのに、この世界の回復は福音によるほかないのに、それを認めようとせず、出て行ってほしいと迫ってくる。それがこの世界と福音の関係の中で起こってくる。

大事なことは、さまざまな霊にとりつかれていくこの世界の中で、神を礼拝することです。神の言葉に聞き、神を賛美する。真夜中、パウロたちが闇の中で神を礼拝したように、この世界の中で、神を礼拝し続けることです。そして福音を信じなさい、と語り継ぐことです。人間が救われるためには福音を信じるほかない、ということはこの世界の真中で、キリスト者一人一人が語っていくことです。